

A Hairpin

A girl was looking into a pond. There was a fish swimming deep in the water.

“Ah!”

She cried. It was because she dropped her ornamental hairpin from her head into the pond. The hairpin sank near the fish.

“Dear fish, pick up my hairpin.”

“What’s this?”

The fish asked her.

“That is called ‘hairpin’ and it is inserted on head.”

She told the fish.

“Is it important?”

“Yes, it’s so important for me.”

The fish got so greedy that she desired it.

“I’m not going to pick up the hairpin. So pick it up by yourself.”

The girl was embarrassed because it was so deep that she couldn’t pick it up by herself. She left there, weeping.

The fish thought it profitable.

“I’ll insert it on head.”

Saying so, she inserted. However, she found it impossible to do so.

She also learned that what is important for others is not important for me.

The next day, the girl came to the pond again. The fish, having the hairpin in her mouth, floated on the water.

“I’m wrong. I’ll send back this hairpin.”

The girl was pleased enough to thank the fish many times. (2023.4.1 by Kudo: Original by Niimi Nankichi)



かんざし

新美南吉

女の子が池の淵から水の中を覗いておりました。

水の中には一匹の魚が沈んでおりました。

「あっ。」

と女の子が叫びました。かんざしが女の子の頭から抜けて池の中に落ちたからであります。かんざしは魚のそばに沈んできました。

「魚さん、かんざしを拾って下さい。」と女の子が魚に頼みました。

「これは何ですか？」

と魚は聞きました。

「それはかんざしと言って、頭に刺すものです。」

と女の子は教えてやりました。

「大事なものですか？」

「ええ、私には大事なものです。」

そこで魚は欲が出ました。かんざしを自分のものにしたいと思いました。「私は拾ってあげません。自分でお拾いなさい。」

女の子は困ってしまいました。水は深いのでとても自分で拾うことはできません。女の子は泣きながら行ってしまいました。

魚は大変徳をしたと思いました。

「ひとつ頭に刺してみよう。」

と言って、かんざしを刺してみました。その時、自分の頭にはかんざしが刺せないことが初めてわかりました。

そしてまた、他の人には尊いものであっても、自分にはちっとも尊くないこともあるのだ、ということがわかりました。

次の日、女の子はまた池の淵にやってきました。

魚はかんざしをくわえて、水の上に浮かびました。

「私が悪うございました。さあかんざしをお返しします。」

女の子はどんなに喜んだことでしょう。何度も何度もお礼を言いました。

